

直方市学校規模適正化基本計画検討委員会（第5回）会議録（要点筆記）

○開会及び閉会に関する事項

・開催日時

令和7年7月30日（水）

開会 14時00分 閉会 16時10分

・開催場所

直方市中央公民館4階 第4会議室

○出席委員

日高委員、大塚委員、井上委員、矢野委員、松莊委員、

池田委員、池本委員、金本委員、仲野委員、岸田委員

○事務局

宇山部長、石橋課長、青山係長、田代

林課長、船越課長

○配布した資料

⑤(表紙)第五回表紙直方市学校規模適正化基本計画検討委員会

⑤-00 会議次第

⑤-01 答申書（案）

⑤-02 答申書（案）検討用 別紙

⑤-03 報告書（案）

⑤-04 公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引（抜粋）

○会議の記録

1.開会

委員10人の出席があることから、会議が成立していることを確認。

2.議事

(1) 協議

○答申書（案）について

・直方市の目指す学校規模について

・通学区域に関すること（資料④-02）

・地域と学校の連携について（資料④-03）

【協議内容】

・事務局より、答申（案）報告書（案）について、会長・副会長と打合せを経て作成されたものであること、現時点の（案）であり協議後の修正・加筆を行うものである

こと説明。また、答申の内容がそのまま教育委員会の決定となるものではないことを確認。

(直方市の目指す学校規模について)

・小学校については、1 学年 2～3 学級を目指す、ということが良いと考える。

中学校の下限については、1 学年 2 学級・3 学級・4 学級、いずれもメリットデメリットがあるところと考える。中学校の規模が小さいことで厳しいと感じたことは、部活動（主に団体競技）のこと。ただ、部活動は今後地域展開の流れがある。部活動以外で、1 学年 2 学級であることで困ったことはあまりなく、小回りが利くというメリットもあるため、1 学年 2 学級というのも良いのではないかと考える。

校舎の老朽化により、建て替え等をする時に、6 学級の中学校を想定して建て替えをするかという疑問。

近隣の地域の中学校の学級数の現状や、2050 年の児童生徒数予測を考えたときに、中学校全体で 9 学級を維持できる学校がどれくらいあるのか、という疑問がある。そのことから、下限として 12 学級というのは現実的にはいかなものだろう、と考えるところがある。

・学級数の話と併せて、1 学級あたりの児童生徒数のことも考える必要がある。少人数学級のメリットは以前の会議でも話があったが、標準を上回る教員の配置となると市の負担が大きい。1 学級あたりの上限は 35 人としても、下限の議論はとても難しい。

・答申として、人数を記載するかどうかは、検討が必要なところと考えられる。

・地域の人と話す中で、適正規模を目指すことと併せて小規模な学校の良いところに着目してほしいという意見があった。実際、小規模な学校は、地域の方がこども全員の顔を覚えるといった、こどもが育っていく良い環境が整う場合もある。他自治体でも取り入れている小規模特認校についての検討もしてほしい。

・小学校・中学校ともに、1 学年あたり「複数」学級を目指していくということを確認。

・保護者アンケートについて、「中学校の 1 学年の学級数はどの程度が望ましいと思いますか」という質問に対しての、在籍学校ごとの回答結果を知りたい。

→ (事務局) 次回までに準備する旨、回答。

・保護者アンケートについて、回答率が 30%程度ということについては、考えるところがある。答申や報告書でアンケートに触れるのであれば、回答率が分かるように記載しておく必要があると考える。

・自分のこどもの小学校は、1 学年 1 学級の小学校。小規模な学校は、こどもの顔を見ただけで、色々なことがリンクするというメリットはあると感じている。小規模校は小規模校なりの良さがあるとは感じているが、それでも複数学級が良いと思う。クラス替えができる規模、というのが良いと思う。中学校となると、個人的には 1 学年

4・5学級あっても良いと思う。自分の経験で話をすると、クラス替えによって知らない子と出会えるということに楽しさを感じていた。そういったことから、1学年3学級以上は、あった方が良く思う。

- ・学級の数も大事だが、学級の人数も大事かな、と思う。大人数での授業だと理解ができず、少人数の授業が良いという話も聞いたことがある。

中学校の部活については、学校の人数が増えたから部活に入る生徒が増えるという訳でもないかな、とは考える。

- ・目指す学校規模として、「小学校は12学級から18学級」というところで答申を行うことを確認。

- ・教科担任制である中学校において、学校規模が小さいと教員の配置が限られ、免許外指導のような問題が生じることもある。教員の専門性というところは、生徒の教育面に直結する影響の大きい部分であると思われる。

- ・規模の小さな中学校では、教員が受け持つ授業数が少ないという意味で、教員にとっての優位性がある。加配の措置があると、さらに優位性があがるということも考えられるが、加配が今後も継続されるかについては、教員の成り手不足が続く現状においては疑問。教科担任制のことを考えたときに、市内中学校において現在、臨時免許の発行による免許外指導が発生しており、専門性の担保が取れていない状況にある。

- ・小学校、中学校ともに、12学級から18学級を目指すとなると、2050年時点の児童生徒数予測からは学校の数を現在の半分以下にするということになる。学校の数を半分以下にする、というのはあんまりかな、と思うところがある。学校あたりの学級の数が増えるのは良いかと思うが、1学級あたりの児童生徒数についても考えてほしい。

- ・直方市の強みは、小学校と中学校の連携がしっかりとれているところではないか、と感じている。

- ・最近特に、特別な支援が必要な子が増えているのではないかと実感している。

- ・中学校の目指す学校規模について、保護者がどのように望まれているか、というのが重要なところだと考える。次回、アンケートの分析をもって、改めて検討することとしたい。

(通学区域に関すること)

- ・通学距離について、通学路を歩いて歩く距離について検討をすることを確認。

- ・現在、4km歩いたことのない子もいると思う。そのような子が安全に登下校できるよう、防犯対策も考える必要がある。

- ・スクールバスの検討も必要。統廃合によって、通学距離が遠くなったり通学時間が長くなったりするところに対しては配慮が必要と考える。

- ・最近の暑さ等の気象状況を考えると、小学生が歩く時間というのは30分程度を1つの目安として考えるのも良いのではないかと考える。

- ・近隣の自治体がスクールバスをどのように運用しているかということについて、確

認した上で検討したい。

- ・小学校新1年生の登下校に関し、以前のように保護者が一緒に登下校の練習を行うケースが多かったが、現在はそういったことが少なくなっている。教員が付き添って下校するということもあり、教員の負担が大きい。遠方からの通学には、スクールバスの活用を検討してほしい。

- ・小学校1年生と6年生では、違いがある。

- ・通学距離や通学時間について、文部科学省の示す目安と同じ数字での答申をすることも、スクールバス等の措置や、目安を超える場合の措置等を付しての答申を行うということで、異議なしと確認。

(地域と学校の連携について)

- ・学校・保護者・地域との間での意見交換が大事ということは明記しておきたい。

- ・「地域と学校の連携について」という意味合いについて、現在の学校と地域の関係について議論だけでなく、統廃合があった後においてもそれぞれの学校と地域の関係について考えていくことが重要である、と確認。

- ・地域の防災拠点となっている学校や、こどもたちのイベントを多く行っている地域があること等、地域の特性を踏まえた議論が必要だと思う。学校としての機能をなくす場合でも、体育館や避難所の機能を残す等の検討を求める答申としたいと考える。

- ・学校は教育のための施設であるだけでなく、地域コミュニティの核としての性格や、防災機能も併せ持っている。そういった内容を踏まえた答申とすることとしたい。

(通学距離、スクールバスについて)

- ・目安として示す距離（小学生は4km以内、中学生は6km以内）や時間（1時間以内）を超える場合にはスクールバスを活用するということが良いのか、もう少し情報を整理した上での議論が必要と考える。

- ・本検討委員会からは「〇〇のような場合には、スクールバスを検討すべき」といった答申とし、具体的にスクールバスをどういったときに活用するかの検討は教育委員会で行うべきものとする。

(答申、報告書の修正について)

- ・本日の意見を踏まえ、次回の会議の前までに、修正案を各委員に送付することとすることを確認。

3.日程調整

第6回目の開催につき、令和7年8月26日（火）16時から、と決定。

4.閉会